

---

2012

## 情報リテラシー教育を取り入れた初級日本語コースカリキュラム の作成と実践報告

Atsuko Takahashi  
*Smith College*, atakahas@smith.edu

Follow this and additional works at: [https://scholarworks.smith.edu/eas\\_facpubs](https://scholarworks.smith.edu/eas_facpubs)



Part of the [Japanese Studies Commons](#)

---

### Recommended Citation

Takahashi, Atsuko, "情報リテラシー教育を取り入れた初級日本語コースカリキュラムの作成と実践報告" (2012). East Asian Languages & Cultures: Faculty Publications, Smith College, Northampton, MA.  
[https://scholarworks.smith.edu/eas\\_facpubs/16](https://scholarworks.smith.edu/eas_facpubs/16)

This Article has been accepted for inclusion in East Asian Languages & Cultures: Faculty Publications by an authorized administrator of Smith ScholarWorks. For more information, please contact [scholarworks@smith.edu](mailto:scholarworks@smith.edu)

# 情報リテラシー教育を取り入れた初級日本語コース カリキュラムの作成と実践報告

高橋 温子

**抄録：**近年、日本語教育では、日本語中・上級レベルにおいて内容重視型カリキュラムや批判的思考力を取り入れた学習活動を採用する動向がみられている。一方で、初級レベルでは、教科書の基本文法、語彙、表現、漢字を学習するという言語習得を重要視した伝統的なカリキュラムが組まれている。ここで、問題になるのが、教科書中心の初級カリキュラムに慣れた学習者が中級レベルに進む際に、教科書外の教材を中心とした内容重視型カリキュラムで求められる自律学習能力に欠けているという現状である。本稿では、情報リテラシーをどのように言語学習活動に応用できるのかを検討し、日本語教師と図書館員の協働作業のもと、日本語教育と情報リテラシー教育を融合させたカリキュラムを作成し、アメリカ私立女子大学の1つであるスミス大学の日本語1年生コースで実践した例を紹介する。初級レベルから情報リテラシーを言語学習能力と共に培うことは、学習者の初級から中級レベルへの移行をスムーズにし、言語・文化・社会情報に関わる内容重視型の学習活動に必要とされる自律学習能力の育成に役に立つのではないかと考える。

**キーワード：**情報リテラシー、情報リテラシー教育、日本語教育、日本語初級カリキュラム、図書館利用、教員と図書館職員の協働

## 1. はじめに

近年、北米の日本語教育では、日本語中・上級レベルにおける内容重視のカリキュラムや学習者の社会参加型カリキュラム、さらに、批判的思考力を取り入れた学習活動についての研究発表が増えている。内容重視の言語教育の基本概念は、言語と言語以外の教科内容の授業を統合し、その言語を使って内容に関わる学術的な情報を得ることで、言語スキルと知識を伸ばすことである。日本語教育では、歴史・文化・社会に関する情報を日本語で学びながら、異文化理解を促し、知識を広げていこうというものが多。

さらに、内容重視型のカリキュラムに、批判的思考力を取り入れた学習活動を採用する動きも始まっている。近松は、日本語上級レベルにおける「米国シカゴ日系人史」についての内容重視のカリキュラムに、批判的・創造的思考力を取り入れた学習活動の試みを報告している<sup>1)</sup>。さらに、佐藤らは、内容重視型のカリキュラムに、批判的思考力を取り入れたアプローチを「内容重視の批判的言語教育」と呼び、内容に関連した言語スキルと知識を伸ばすことに加え、物事を批判的に考察し、それについて創造的に自分の意見を構成し、自身の意見を書く、またはなんらかの形で表現することで自ら社会に貢献している日本語学習者を育てることを提唱している<sup>2) 3)</sup>。日本語中・上級レベルにおいては、従来の言語教育の枠をさらに越え、内容に関する情報を通して知識を広げるだけでなく、批判的思考能力と創

造性を伸ばすことも目的とした内容重視の批判的言語教育活動を確立しようという動きが、今後さらに強まっていくと思われる。

このような内容重視型のカリキュラムの中で、学習者がクラス活動に積極的に参加し、効果的に言語と内容に関する学習をしていくためには、まず学生自身の自律学習能力が問われる。クラス活動を進めるにあたって、母国語と日本語との間で効果的な辞書活用能力、情報検索能力、情報活用能力というような情報リテラシーが求められるであろう。また、これらの能力は、学生の日本語学習意欲や日本社会や文化についての好奇心を広げる助けにもなるのではないだろうか。さらに、アメリカ図書館協会の Presidential Committee on Information Literacy が、情報リテラシーは、情報社会において「生涯学習」の一翼を担う<sup>4)</sup>と唱えているように、日本語教育においても、情報リテラシーは学生の生涯に渡る日本語学習に不可欠な能力といえるのではないかと考える。

そこで、筆者は、情報リテラシーを備えた日本語学習者を育てることを目的に、アメリカ東海岸の私立女子大学、スミス大学（以下、本学と言う）の図書館員と協働作業のもと、日本語初級レベルの段階から情報リテラシーの概念を取り入れたカリキュラムを考案し、本学日本語プログラムで実践を試みた。本稿では、その協働作業の過程とカリキュラムの実践について報告する。

## 2. 背景

本章では、日本語初級カリキュラムに、情報リテラシーを取り入れることにした経緯について述べていきたい。

### 2.1 教科書中心から生教材中心のカリキュラムへの移行における問題点

一般的に、北米での日本語初級レベルのカリキュラムは、教科書中心である。ひらがな、カタカナの学習からはじまり、基本文法、表現、語彙を習得すべく、常に学習者は教科書で日本語を勉強している。教科書には、語彙リストや文法説明があり、読み物は初級学習者が読めるよう、語彙、表現、文法が適切に調整されている。一方、中級・上級の内容重視型コースでは、教科書から離れ、新聞記事、雑誌、文学、ウェブサイトなどの抜粋記事を読んだり、ニュースやビデオクリップや映画などを見たりしながら、社会問題や文化、歴史について話し合い知識を広め、クラス活動やプロジェクトワークを進めていくカリキュラムを採用している。日本語教育では、日本人が普通に読んだり見たり聞いたりする日本語を使った教材を生教材というが、中・上級のクラスでは生教材を中心にカリキュラムが組まれていくことが多い。

ここで問題が生じるのが、教科書から生教材への移行の時期である。教科書で勉強することに慣れた学生が、まず戸惑うことは、生教材に単語表や文法説明がついていないことである。たいていの学生は、辞書を使って読もうとするが、効率的に読み進められず、意味理解と内容理解に四苦八苦するようだ。教科書中心の学習に慣れた学生は、内容重視型の学習活動に移行していく際に求められる学習能力が備わっていないために、生教材中心の学習活動に抵抗を感じてしまうようである。

このような現状から、教師はクラス活動の工夫や補強教材の作成に加えて、まず、学生に辞書の効果的な使い方を指導することから始めなくてはいけない。数年前、北米日本語教師の学会発表で、初級から中級への移行について聴衆に尋ねたところ、会場にいたほぼ9割の日本語教師が、「中級レベルへの移行の際、生教材を読むための基本的な読みの技術と学習能力に欠けている学生が多く、クラス活動をするのがかなり大変だ」と答えた。教科書から生教材に移行する時期は、学生にも教師にもかなりストレスがかかっているようである。

### 2.2 日本語教師の試行錯誤の問題解決策

筆者が2004年の秋から教鞭をとる本学において

は、当時、教科書から生教材へ移る日本語3年生後期までに、学生は基本文法、語彙、表現、漢字学習が終了するというカリキュラムが組まれていた。しかし、生教材を扱うクラス活動のための準備はできておらず、日本語3年生後期以降の内容重視型クラスにおいては、教師は補強教材の作成やカリキュラムの調整、各学生への配慮などにおわれ、中・上級の日本語学習が効率的に進まないのが現状のようであった。

筆者自身、2006年秋学期に、本学日本語4年生のクラスを初めて担当したのだが、学生らが内容重視型のクラス活動に対して受け身的であり、クラスの学習活動が効果的に進まなかった。そして、日本語学習者として、言語能力は中・上級であるはずの学生らの辞書活用能力、情報検索、情報選択、情報活用能力の低さに懸念をもつようになった。そこで、教科書中心から生教材中心カリキュラムへの移行を少しでも円滑にし、中・上級レベルの内容重視型カリキュラムを意義あるものにするためには、初級レベルの時期から中・上級レベルに必要な辞書活用能力、情報検索、情報選択、情報活用能力を養うことが必要なのではないかと考え、2007年春学期から、日本語2年生のカリキュラムに和英辞書や漢字辞書の使い方を取り入れるクラス活動を試みた。これは、漢字学習がさらに大変になる日本語3年生コースの下準備を兼ねたものでもある。

2007年に、Jim Breenが開発したWWWDICオンライン漢字辞書サービス<sup>5)</sup>が完成していたので、コンピューター教室に学生を集め、漢字辞書の引き方の基本を指導し、オンラインの漢字辞書を使いながら、「赤ちゃんの名前のつけかた」について、日本人が書いた簡単なオンライン投稿を読むクラス活動をした。さらに、学期の終わりには、生教材を読む練習として、オンラインの和英辞書と漢字辞書を使いながら、谷川俊太郎の詩集『すき』<sup>6)</sup>と星新一の短編作品のひとつ『悪魔』<sup>7)</sup>を読んでみることにした。最初、辞書を引く作業を面倒くさがっていた学生も、最後に辞書を使いながら日本文学が読めたことは、大きな達成感につながったようだった。

### 2.3 情報リテラシー教育を日本語教育に取り入れた経緯

先に述べたように、筆者は日本語教師としての知識と経験をもとに、オンライン辞書の使い方の指導や辞書を活用したクラス活動を日本語2年生のカリキュラムに取り入れ始めたのだが、2008年の秋、本学の図書館員の方が「情報リテラシー教育の概念」を日本語カリキュラムに生かしてみてもどうか



と声をかけてくれ、情報リテラシーと日本語教育について話し合う機会をもった。

一般的に、大学機関での他学部の教員や専門職員との意見交換や交流の場をもつことは大学の規模が大きくなればなるほど難しくなる。しかし、専門分野が違おうが大学内に似たようなアイデアを持って日々教育活動をしている教員や職員は必ずいるものだ。本学では、2003年から図書館利用における情報リテラシー教育が始まり、2004年以降からは学部と提携しながら情報リテラシー教育を広めていく方針を進めている<sup>8)</sup>。

声をかけてくれた図書館員の方は、情報リテラシー分野が専門でもあるが、学生時代はカナダの大学で日本語を勉強し、日本の大学院で研究活動をした経験があり、本学では東アジア言語文学専門の図書館員として活躍されている。日本語と関わりながら図書館員として活動するにあたり、情報リテラシーの概念を図書館教育だけに留まらず日本語教育にも応用できるのではないかという考えを話してくれた。

また、互いに「中・上級レベル学習者の辞書活用能力、情報検索、情報活用能力の低さ」を懸念していること、そして、「どのように初級学習者の時期から辞書活用能力や情報活用能力を育てたらよいか」ということに関心を持っていることがわかった。そこで、「日本語教育において情報リテラシーとはどのような言語活動に置き換えられるのか」、「どのような形で情報リテラシーを日本語コースカリキュラムに応用できるのか」を共に検討していくことにした。そして、日本語教師と図書館員の協働作業のもと、情報リテラシーの概念をフレームワークとして取り入れる方法で、日本語初級レベルのカリキュラムを作成していくことにした。

### 3. 日本語教育と情報リテラシーについて

#### 3.1 情報リテラシー

情報リテラシーは、図書館教育外の学術分野でも取り入れられており、概念規定も分野によって様々であるが、本稿では、情報リテラシーとは、アメリカ図書館協会が定義した、必要な情報を認識し、効率的にそれを探し出し、評価し、目的に応じて効果的に活用する能力<sup>9)</sup>に基づくものとする。Abilockによると、「情報リテラシーとは、個人が自身の学習活動に必要な情報は何かを把握し、それを検索、理解、評価し、選択された様々な形態の情報を使って、個人、社会、あるいは世界のために、何かを創りだしていく過程のことである」と定義している。さらに、情報リテラシーを構成する概念として、学

習者の情報検索の効率のよさと的確さ、情報に対する理解と批判的思考、情報を適用し活用するための自律性、社会性、倫理性、創造性などもあげられている<sup>10)</sup>。Grassian と Kaplowitz は、情報リテラシーは、総合的な問題解決能力であるという見解から、タスクベースアプローチで情報リテラシーの指導することを薦めている<sup>11)</sup>。また、大学レベルでの情報リテラシー教育を行うにあたり、Mackey と Jacobson は、大学レベルでの情報リテラシー教育を効果的に進めるには、大学教育においてどのような学習者を育てたいのか、図書館員と大学教員が意見と関心を共有し、互いの専門知識や技術を提供しあい、チームとなって情報リテラシー教育を行うという協働作業のモデルを提唱している。協働作業を通して、コースの目的に沿いながら、学習者の批判的思考を促すクラス活動を作成していくことの必要性も述べている<sup>12)</sup>。

そこで、我々は、最初の話し合いをもった2008年の秋以降、年ごとに段階を踏み、本学日本語初級レベルにおいて、情報リテラシーはどのような言語学習能力につながっているのかを検討しつつ、教師は具体的にどのようにクラス活動に応用できるのかを考案し、それを実践することを試みた。

#### 3.2 初期の初級日本語情報リテラシー教育の取り組み

我々は日本語情報リテラシー授業の最初の試みとして、2009年の日本語2年生春学期コースで漢字辞書の使い方について、協働作業をもとに授業をした。図書館教育を兼ねて図書館で授業を行うとともに、俵万智の『サラダ記念日』<sup>13)</sup>の短歌のいくつかを、様々な漢字辞書を使いながら翻訳してみるというものであった。筆者が過去に単独で行った漢字辞書の使い方指導と大きく違う点は、1) 図書館で授業をすること、2) 学生に、様々な書籍の漢字辞書を使わせ、辞書による情報の違いや情報体系を認識させること、3) 現代短歌を生教材として使用し、既習文法の認識、語彙や漢字の検索、読解などの言語活動に利用することであった。詳しい内容は、Domier の *Infusing Information Literacy into the Japanese Language and Literature Program at Smith College*<sup>14)</sup> を参考にさせていただきたい。Domier はこの報告の中で、初級日本語学習者への情報リテラシー教育は、学生の日本留学への準備に役立ち、上級レベルでの日本文学と日本語学習のつながりを強めることにはなるのではないかという意見を述べている。

この日本語2年生での漢字辞書指導の後、我々

は、日本語1年生から辞書の使い方指導や情報リテラシー教育を始めることはできないかと考え、翌年の日本語1年生のコースに、情報リテラシー概念を取り入れたカリキュラムの作成を試みることにした。

#### 4. 日本語1年生春学期コース（第2学期目）における情報リテラシー教育カリキュラムの実践

本章では、本学日本語1年生春学期コース（第2学期目）に、教科書主体のアプローチを生かしつつ、図書館と連携した日本語情報リテラシーカリキュラムの実践方法について述べていきたい。

本学日本語1年生は秋学期（第1学期目）に『げんき1』<sup>15)</sup>の第8課まで、春学期（第2学期目）に第9課から『げんき2』<sup>16)</sup>の17課まで勉強する。カリキュラムは教科書中心、クラスでは文法導入の講義と練習が中心である。2010年春学期から2012年の春学期の3年間を通して、学生数の平均は1クラス約15名で、1年生2クラスの合計学生数は約30名である。

##### 4.1 教科書主体のカリキュラムを生かす

一般的に、初級レベルは学習者の基本的な日本語読み書き能力やコミュニケーション能力を育てるのが目的とされており、週5日制で、綿密なカリキュラムを採用している大学が多い。各大学の日本語プログラムで、レベル別の進度が決められており、日本語教師はその進度に従ってカリキュラムを進めていく。筆者は、近隣大学の日本語教師に、初級レベルから何か教科書外の教材を使うことについて意見を聞いたが、「初級は教科書内容をこなすことが精一杯で、綿密なカリキュラムの中で教科書外の教材を使う余裕がない」という声が多かった。日本語教師が教科書外のことを初級カリキュラムに取り入れていくのは、現実的に難しいことは確かである。

そこで、我々は、教科書中心のカリキュラムを崩さずに、情報リテラシー活動を取り入れる方法を考えることにした。教科書の内容や読み物テーマに沿ったトピックで、日本語を使いながら情報リテラシー活動をするというものだ。日本語1年生情報リテラシー教育での教科書主体のアプローチのよさは、1)教科書から離れた学習量を増やさずにすむ、2)教科書で既習した、またはこれから習う文法、表現、語彙、漢字などをクラス活動に使ったり、応用したりできる、3)教科書に出てくる言語的、文化的な知識に、教科書外の情報源や別の視点から関わるができる、4)教科書と外の世界とのつながりを学生自身が自ら学習体験でき、自律学

習を培う手助けになったり、好奇心を広げるきっかけになることである。

##### 4.2 日本語情報リテラシーの目標を設定する

我々は、情報リテラシーの概念が、日本語初級レベルのカリキュラムにどのようにあてはまるかを検討しつつ、本学日本語1年生春学期における日本語情報リテラシーの目標を以下のように設定した。

1. 様々な和英辞書を使って、知らない単語や忘れてしまった単語を調べることができる。
2. 文脈や状況に応じて、適切な語彙や表現を選ぶことができる。
3. 日本語で、昔話、短いエッセイ、旅行の情報などを読むことができる。
4. 適切な情報源から、興味があるトピックについて多様な情報を探することができる。
5. 検索した情報を取り入れながら、自分の言葉で何か短い文章を書くことができる。
6. 情報の検索と活用活動を通して、日本語を使いながら、何か新しい知識を生み出すことができる。
7. 日本語学習において、知的好奇心や自律学習能力を高めていくことができる。

これらの目標を達成するために、教科書中心のカリキュラムで、どのような日本語情報リテラシー活動ができるかを考え、具体的な教案の作成をし、初級日本語情報リテラシーの授業を実践することにした。

##### 4.3 図書館で日本語のクラス活動をする

大学の図書館には、日本文学や新聞、英和・和英辞書や漢字辞書、日本映画やドラマのDVDなど、日本語学習者がいつでも利用できるような日本語関連のリソースが揃っている。また、我々は、ここ数年、日本語初級学習者が読めるような本を選び、それらを図書館に購入してもらい、初級学習者向けの日本語学習リソースを増やしているところである。

しかし、図書館に日本語関連のリソースがあることを知らない学生や、知っていても利用の仕方がわからない学生が多いようである。また、ここ数年、「日本映画やアニメをどこで知って、何で見ているのか」と聞くと、多くの学生が「インターネットで情報を知り、コンピューターで見ています」と答える傾向がある。コンピューターが部屋にあれば、インターネットで情報と簡単につながれる時代であり、学生はあえて図書館に足を運ばなくなっているようだ。とはいえ、学生に図書館をもっと利用してほしいというのは我々の願いである。教室の外で日本語



学習をするにあたって、ネットでは利用できないリソースの種類、それらの利用の仕方や利用価値を知ること情報リテラシー教育の一部ではないかと考える。そこで、初級レベルの時期から図書館の日本語学習リソースに関心を持ってもらい、利用してもらおうと、日本語情報リテラシーのクラス活動を図書館で行うことにした。

本学の図書館には、グループ学習ができるようなスペースが設けられている。そこには、6名が座れる大きい机が3つ置かれており、いくつかグループ学習用のデスクトップ・コンピュータが設置され、また、無線LANも入っている。我々は、この図書館のスペースを使い、教科書中心のカリキュラムの中で、1学期を通して3回、日本語情報リテラシーの授業を計画した。2010年の当初は5回計画したのだが、教科書中心のカリキュラムの中で、図書館で1学期に5回の授業は教師にも学生にも多すぎたという反省から、2011年以降、3回に減らすこととなった。

#### 4.4 図書館員と日本語教師が協働で授業を進める

図書館での日本語授業は、日本語教師と図書館員が協働で行った。授業の教案は日本語教師が作成し、それをもとに図書館員と日本語教師で授業の流れについて詳しく打ち合わせをした。基本的に、日本語教師が日本語の言語指導をし、要所で図書館員が図書館利用の仕方や日本語リソースの紹介をするという形をとりながら授業を進めた。全体指導の後、グループ作業に移った時も、教師と図書館員が各グループの間を歩き、作業の過程の様子をみながら、学生に細かい指導をした。このように、日本語教師と図書館員が協働で授業をするのは、めずらしいかもしれないが、日本語学習と情報リテラシー活動に二重のサポートをすることで、授業が効果的に進んだのではないかと思う。

#### 4.5 情報検索、情報活用能力を言語活動に応用させた教案を作成する

##### 4.5.1 日本語での言語活動

教科書の内容に沿いながら、情報リテラシーを意識した日本語クラス活動を実践するにあたり、言語四技能（話す、聞く、読む、書く）のどれか2つの技能を使ってクラス活動ができるように教案を作成した。例えば、教科書で紹介された内容に関連づけた質問を日本語で学生に提示し、質問に必要な情報を日本語のインターネットや本で検索、母国語の助けを借りながら理解させる。次に、見たり読んだり

聞いたりして得た情報を、既習した文法、表現、語彙、漢字などを使いながら、会話練習、書く練習などの言語活動に応用していくようにした。クラス活動前後の予習や宿題内容も、同じ形式をとるように作成した。

##### 4.5.2 トピックを中心にタスクベースのクラス活動

クラス活動の教案には、必要な情報はなにかを検討し、見つけ出した情報の有効性、正当性、適切な使用方法を評価し、その情報を目的に沿いながら効果的に活用し、外部に発信していくという、基本的な情報リテラシー概念をフレームワークとして取り入れた。まず、日本語情報リテラシー授業では、教科書で習っている内容にしたがってトピックを設けた。第1回目は、『げんき1』10課の読み物の「かさじぞう」と同じく、昔話「かさじぞう」、第2回目は『げんき2』13課の読み物「日本のおもしろい経験」に関連づけた「日本愛 (Japan Ai)」、第3回目は『げんき2』17課の読み物「ドラえもん」と漫画「ドラえもん」にちなんだ「擬音語擬態語」というトピックで、そのトピックに関わる本、ウェブサイトなど、教科書の外にある情報源を準備し、タスクベースアプローチに基づく課題を考案した。学生は、課題にある質問に答えるために、必要な情報はなにか検討し、情報検索ツールや和英辞書（書籍またはオンライン）を使いながら、情報源から適切な情報を探し出す。そして、いくつかの情報源の中から目的に合った適切な情報を選び、それを自分の意見や発言の中に取り入れ、日本語で表現するという言語活動に発展させた。例えば、第1回目の「かさじぞう」のクラスでは、学生には教科書の語彙リストを削除した「かさじぞう」の読み物を渡した。それをいくつかの和英辞書を使いながら意味理解と内容理解を促し、「かさじぞう」の話を読む練習をした。話を読み終えた後は「かさじぞう」の絵本から抜粋した絵を数枚使い、日本人の子供たちに「かさじぞう」を語り聞かせることを想定して、「かさじぞう」の紙芝居を演じる活動をした。

また、クラス活動で提示する質問は学習者の主観的な意見や個人的な興味、関心を助長するように作成した。例えば、第2回目の日本語情報リテラシー「日本愛 (Japan Ai)」のクラスでは、学生が自ら日本での旅行を計画するというクラス活動をした。まず、準備段階として、クラスで教科書の読み物「日本のおもしろい経験」を読み、語彙、文法の復習と内容理解を済ませておく。翌日の情報リテラシー授業では、Aimee Major-Steinberger の『日本愛 Japan Ai』<sup>17)</sup> や日本政府観光局のウェブサイトなど

の生教材を情報源として、日本で旅行してみたい場所、そこでしてみたいこと、食べてみたい食べ物、おみやげに買いたい物などについて検索させた。そして、どうしてその場所を選んだのか、どんな所なのか、その食べ物を食べてみたい理由などを含んだ簡単な計画書を、既習した文法、表現、漢字、語彙を使いながら書かせた。最後に、それをクラスメートや他の人たちと共有するために、学生の個人ブログに投稿してもらった。

#### 4.5.3 予習と復習

また、50分という短い授業時間を効率的にこなすため、情報リテラシー活動のための図書館のウェブサイトやコースウェブサイトを設置し、クラスの活動内容、予習、宿題をするためのリンクを張った。ウェブサイトで情報検索をする場合、起点のウェブサイト、何かわからなくなったら訪れるべきウェブサイトがあるほうが、検索がやりやすいようである。

図書館授業をする前日に、学生に予習として10~15分程度のオンラインでできる簡単な宿題を出した。予習は与えられた質問について簡単な調査をしてくるもので、授業内ではその予習内容を使って課題をこなしていく形式をとった。習った情報検索技術や日本語を使ってその情報を活用するための復習としては、和英辞書と英和辞書を使いながら『レベル別日本語多読ライブラリー』<sup>18)</sup>の各冊子を読んで簡単なレポートを書いたり、短いエッセイを書くプロジェクトを行った。また、学んだ情報検索や情報活用の技術は、次回の図書館授業でも使えるよう、クラス活動に取り入れた。このように、図書館授業の後にも日本語情報リテラシー活動を続けていくことで、学生の情報活用能力と言語習得の向上を図ろうと考えた。

#### 4.5.4 グループ作業のスタイル

クラス活動は、最初に全体指導をした後、課題についてペアやグループで作業に移る形式をとった。全体指導では、情報源の説明、情報検索の仕方、その情報の活用法について、日本語教師と図書館員が交代で指導をした。その後、全体指導の内容をもとに、与えられた課題についてグループ作業を進めて行った。グループ学習のよさは、学生同士が互いに助け合え、励まし合え、また、ぶつかり合って、自分が得た知識や技術を、わかりやすく相手に説明し、それを学習経験として共有できるという利点がある。また、お互いの知識や技術を比べ合い、どちらが効果的か能率的か話し合うこともできる。しか

し、コミュニケーションがうまくいかないグループもあり、ぶつかってばかりいたり、グループの一人だけがタスクをこなしていたりする場合もあるのが欠点である。教師や図書館員は、常にグループ作業の進み具合をモニターしていることが大切である。

### 5. まとめ

先に提示した、本学日本語1年生の日本語情報リテラシー7つの目標を考慮しながら、実践の結果を述べていきたい。

#### 5.1 情報検索と活用能力

情報検索については、図書館授業の第3回目までに、学生は授業時間内に与えられた課題について、習った検索ツールを使いながら、かなり効率的に情報検索ができるようになったようである。例えば、最初は日本語のウェブサイトを見て戸惑っていた学生も、第3回目の授業では、あまり違和感なく日本語のウェブサイトを見て課題をやっていた。わからない単語や漢字があれば、なんらかの辞書を使って日本語のウェブサイトから、必要な情報を検索し、それを使いながら日本語で話したり書いたりする活動や、日本語でタイプすることも、だんだん慣れてきたようである。また、課題をこなしていくに連れて、見つけ出した情報を取り入れながら、質問に対して文を作っていくのが上手になったと思う。得た情報を効果的に文脈の一部として取り入れながら、学生なりに工夫して日本語で紙芝居をしたり、読み物のレポート、旅行の計画書や作文を書いたりしたのは感心した。

#### 5.2 辞書の使い方

学期を通じて、辞書を使いながら読むことは、かなり慣れてきたようだが、辞書を使って書くことに関してはまだまだ練習が必要である。学期の後半、自分で英和、和英辞書を使いながら、原稿用紙1~2枚程度の作文を書く宿題を出した。これは、さまざまな辞書を使いながら、文を書くことの練習であるが、直訳で語彙を選ぶ学生が多く、文脈にそった適切な語彙選びというのは、1年生にはかなり難しいように思われた。しかし、わからない語彙や表現を空白、あるいは英語のままにして作文を書いてくるようなことがなくなったのは、いい傾向ではないかと思った。日本語での読み書きをするにあたり、学生全員がなんらかの情報源を使って、情報検索をし、活用しようとする姿勢が身についたようである。



### 5.3 学習者の好奇心と学習意欲

各図書館授業における課題の中で、学習者の主観的な意見や興味を促すような質問を提示したところ、それぞれの学生が情報源から必要な情報を探し、自分の興味や好奇心に応じて、課題を楽しみながら取り組んでいた。例えば、「日本愛 (Japan Ai)」の授業では、情報検索をすることで、日本の地方独特の文化に興味をもち、「りんごが大好きだから、青森県に行って、山の上でおいしい青森のりんごを食べてみたい」という旅行案を作る学生もいた。また、「擬態語擬声語」の授業の後、学生は擬態語擬声語を見たり聞いたりすると、その意味を調べてクラスメート同士で教え合ったり、筆者に正しい使い方を聞いたりしてることが多くなった。学期末のスキット発表では、擬態語を使ってパフォーマンスをしたグループもあった。このように、興味をもったことには、自分自身の好奇心と知識をどんどん広げていくのには感心した。

## 6. 考察

### 6.1 図書館との提携

図書館で日本語の授業をするにあたり、学生にとっては、図書館にある日本語リソースを知るきっかけにもなり、それをその場で使いながら授業をすることで、教室と図書館との距離が近くなったのではないと思う。何より、教室から出て日本語を勉強するいい気分転換になったようである。また、図書館員にとっては、授業内で外国語学習者に触れ、外国語学習者のニーズを知ることができ、図書館にどのようなリソースが必要とされているのかを考え直すよい機会であったとのことである。日本語教師としては、図書館と連携することにより、学生の自律学習能力を育てるためのカリキュラムを考案、作成、実施することができ、本学の日本語プログラムの向上にも貢献できたと思う。このように、図書館と学部が連携することによって、図書館と教室での学習活動のつながりが強調され、大学内の教育活動の促進につながっていくのではないかと考える。

### 6.2 日本語情報リテラシーを伸ばす種を植える

今回、情報リテラシーを取り入れた初級日本語カリキュラムを実践して、学期の最後に一番強く感じたのは、情報リテラシーを日本語学習に応用できる能力が携わった初級学習者を育てることのすばらしさとその学生たちと授業を共にする楽しさである。学生は辞書を活用することで、初級レベルでも教科書外の日本語リソースの内容がわかるという喜びを感じたようである。また、情報検索によって自身が

興味あることについて追求できるおもしろさ、情報活用能力と言語応用能力を生かして日本語で自分自身を表現できる楽しさを実感し、初級レベルでも教科書の外とつながって自分の個性が表現できるという自信をつけたようだ。そして、このような学習者が、日本語教育に更なる教授法やカリキュラム作成の可能性を広げてくれるのではないかと思う。クラス活動がより効率的に進められるだけではなく、日本語リソースを効果的に利用した幅広くまたは奥深い内容重視型の学習活動を可能にするのではないだろうか。これらのことをふまえ、近年、内容重視の批判的言語教育や学習者の社会参加型カリキュラムが唱えられている中、教科書の外とつながる技術の向上や、好奇心や探究心の育成、自律学習能力の促進のために、初級レベルの学習者に情報リテラシーの種を植えることの必要性を強く感じる。

## 7. おわりに

本稿では、日本語教育に情報リテラシーの概念を取り入れた初級カリキュラムの実践について報告したが、情報リテラシーを取り入れた言語教育の実践は、まだまだ始まったばかりである。筆者の経験では、日本語初級学習者に情報リテラシーの種を植えることは、学習者の自律学習能力や学習意欲を高める効果があるのではないかと推測する。本学では、日本語プログラムに続き、中国語とフランス語プログラムでも情報リテラシーを語学教育に取り入れはじめている。中国語プログラムは、我々が作成したカリキュラムをモデルにしており、フランス語プログラムでは、辞書活用能力促進を目的とし、情報リテラシーを取り入れたとのことである。将来、各言語プログラムでどのような結果が得られたのか調査してみたいと考えている。

図書館員と日本語教師の協働作業においては、どのようにカリキュラム作成と実践に取り組むか、お互いの関心について話し合い、それぞれの視点からアイデアを出し合うことが大切である。互いに、従来の仕事量がやや増えるのは事実だが、協働作業から得られる知識と経験は、互いの専門分野に新たな知恵と可能性を与えてくれるのではないかと思う。今後も、図書館界と日本語教育界の意見交流や提携により日本語情報リテラシー教育の向上と実践に努めていきたい。

### 参考文献

- 1) 近松暢子. 「ツールを越えた思考プロセスとしての日本語へ：コンテンツベースにおける批判的・創造的思考活動の可能性」ジャーナル CALJE, 12,



2011. p. 1-22.
- 2) Sato, S., Hasegawa, A., Kumagai, Y., & Kamiyoshi, U. (in press). Critical Content-based Instruction (CCBI): Theories and Japanese Classroom Practices. "Japanese Languages Education: Current Issues and Future Agenda." Honolulu: National Foreign Language Resource Center Publications, Forthcoming.
  - 3) 佐藤慎司, ロチャー松井恭子「内容重視の批判的言語教育 (CCBI)」の理論と実践: 初級日本語の文字プロジェクト Conference Proceedings. (online), 18th Princeton Japanese Pedagogy Forum, 2011. <http://www.princeton.edu/pjpf/past/18th-pjpf/> (accessed 2012-08-05)
  - 4) Association of College and Research Libraries, Presidential Committee on Information Literacy: Final Report. 1989. (online), <http://www.ala.org/acrl/publications/whitepapers/presidential> (accessed 2012-11-04)
  - 5) Jim Breen's WWWJDIC: Online Japanese Dictionary Service. (online), <http://www.csse.monash.edu.au/~jwb/cgi-bin/wwwjdic.cgi?1C> (accessed 2012-10-08)
  - 6) 谷川俊太郎. すきー谷川俊太郎詩集 (詩の風景). 理論社, 2006.
  - 7) 星新一. ポッコちゃん. 改版, 新潮社, 1971.
  - 8) Information Literacy Smith College Libraries. (online), <http://www.smith.edu/libraries/services/faculty/infolit/> (accessed 2012-08-05)
  - 9) Association of College and Research Libraries, A Division of the American Library Association. Information Literacy Competency Standard for Higher Education. 2000. (online), <http://www.ala.org/acrl/standards/informationliteracycompetency> (accessed 2012-08-05)
  - 10) Abilock, Debby. Information Literacy at Noodle, 2007. (online) <http://www.noodletools.com/debbie/literacies/information/lover/infolit1.html> (accessed 2012-08-05)
  - 11) Grassian, Esther S.; Kaplowitz, Joan R., Information Literacy Instruction Theory and Practice, New York: Neal-Schuman, 2001.
  - 12) Mackey, Thomas P.; Jacobson, Trudi E. Information Literacy: A Collaborative Endeavor, College Teaching, Vol. 53, No.4 (Fall, 2005), p. 140-144.
  - 13) 俵万智. サラダ記念日. 河出書房新社, 1987.
  - 14) Domier, Sharon. Infusing Information Literacy into the Japanese Language and Literature Program at Smith College, Occasional Papers Bridging Japanese Language and Studies in Higher Education, Association of Teachers of Japanese, 2009, p.10-11.
  - 15) Banno, Ohno, Sakane, Shinagawa. げんき GENKI I: An Integrated Course in Elementary Japanese Second edition. The Japan Times, 2011.
  - 16) Banno, Ohno, Sakane, Shinagawa. げんき GENKI II: An Integrated Course in Elementary Japanese II, Second Edition. The Japan Times, 2011.
  - 17) Major-Steinberger, Aimee. 日本愛 Japan Ai: A Tall Girl's Adventures in Japan. Go! Comi, 2007.
  - 18) NPO 法人日本語多読研究会. レベル別日本語多読ライブラリー にほんごよむよむ文庫 レベル 1 アスク, 2006, 2007, vol.1, vol.2.
- 
- < 2012.8.9 受理 たかはし あつこ スミス大学日本語常勤講師 >

## Atsuko TAKAHASHI

### Getting rid of the training wheels - Incorporating information literacy in beginning Japanese

**Abstract :** In recent years, there has been a trend in Japanese language education to incorporate learning activities that place more emphasis on content-based education and critical thinking in the curriculum at the intermediate and advanced levels. At the elementary level, however, the curriculum still maintains the traditional emphasis on language acquisition through textbook-based grammar, vocabulary and kanji. This is where the challenge lies: students who have become accustomed to textbook-based learning at the elementary level do not have the skill sets to learn autonomously when they advance to the intermediate level where much of the content comes from outside the textbook. This paper explores how information literacy can be applied to language learning, through the collaborative efforts of language instructor and librarian, by using the example of a first year Japanese language course at Smith College (a women's university in the United States). The author believes that by learning information literacy skills together with language from the beginning, students are able to progress smoothly from the elementary level to the intermediate level, and are better able to do the independent research necessary for content-based activities

relating to language, culture, and society.

**Keywords :** information literacy / information literacy education / Japanese language education / elementary Japanese language curriculum / library use, faculty-librarian collaboration

資料 日本語情報リテラシー授業内容の基本例

教科書の読み物	図書館授業トピック	クラス内指導内容
『げんき 1』 10 課  かさじぞう	かさじぞう	<p><b>予習:</b> 漢字と語彙の練習, 「じぞう」について調べてくる</p> <p><b>クラス内活動:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 図書館の日本語学習リソースの紹介</li> <li>- 和英辞書の使い方の紹介</li> <li>- 和英辞書を使って, かさじぞうを読む</li> <li>- 日本人の子供たちに語り聞かせることを想定し, 口頭でかさじぞうを紙芝居形式にする</li> <li>- インターネット辞書, リーディングツールの紹介</li> <li>- 図書館にある昔話の本, 多読ライブラリー, オンラインで読める昔話, 絵本の紹介</li> </ul> <p><b>復習:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 辞書を効果的に使いながら, 多読ライブラリーや昔話を読んで, 読んだ話について簡単なレポートを書く</li> <li>- ブログにのせる</li> </ul>
『げんき 2』 13 課  日本の おもしろい 経験	日本愛 (Japan Ai)	<p><b>予習:</b> Japan Ai のコースサイトで, 「日本愛 Japan Ai」を読み, 質問に答える</p> <p><b>クラス内活動:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 「日本旅行の計画」を立てる。行きたい場所, そこでしてみたいこと, 食べてみたい物, おみやげなどについて調べる</li> <li>- 自分の必要性にあった情報源を探す</li> <li>- 和英辞書の使い方の復習</li> <li>- インターネット辞書/リーディングツールを使って日本語ウェブサイトを読む練習</li> </ul> <p><b>復習:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 「私の日本旅行の計画」をブログにのせる</li> </ul>